

第10回福山駅前デザイン会議を開催

日時：2021年（令和3年）5月31日（月）15時00分～17時00分
場所：福山市役所 60会議室（オンライン開催）



今年度から、駅周辺の変化と連動しながら、駅前広場の検討に着手するため、今回のデザイン会議は、「ウォーカブルな駅前広場の実現に向けて」を議題として議論を行いました。駅前広場は備後圏域の玄関口であるとともにウォーカブルな駅周辺の核となる場所です。この空間を交通結節機能と都市の広場機能が融合する空間へと変えることで、駅周辺への人の流れを生み出し、駅周辺を良質な民間投資を呼び込める魅力とにぎわいのある空間に転換していきます。

ウォーカブルなまちづくりに対して出された意見

- 「ウォーカブルなまちづくり」とは、まちのエリア価値を高め、経済の好循環を生み出し、まちへの再投資を呼び込む好循環を生み出すものだ。
- 全国各地で「ウォーカブルがなぜ必要なのか」を消化できていない。なぜウォーカブルをめざすのかをスタートとする必要がある。市の説明では「ウォーカブルなまちづくりは、良質な民間投資を呼び込む」としている。確かに、ウォーカブルにする前は良質な民間投資は起きにくい。民間は動機がないときや社会状況が悪いときは動かない。今回、ウォーカブルという石を投げ込むのは、膠着した状況に一石を投じる良い機会だ。
- ウォーカブルなまちになれば、世代と属性の多様化・平準化が起きるだろう。若い世代がいなくていずれまちは途絶えてしまう。多様な属性が存在し、小さな子どもから高齢者までのあらゆる世代が平準化していることが、まちとしての健全な状態である。
- 世代と属性の多様化・平準化が起き、今まで来なかった人がまちを訪れるようになると、そのまちに新しい産業や交通サービスの充実が求められ、新しい未来を考えるチャンスが広がる。例えば、子育て世代が来ると安心・安全な環境が必要となり、そこに商業や経済の再生が連鎖してくる。経済活動が盛んになると、交通需要が増えるので、それに伴って、公共交通が成り立つ好循環が生まれてくる。
- ウォーカブルな空間とは、ただ単に歩行空間を増やすとか、歩く人を増やすというわけではない。ウォーカブルな空間をつくるという考え方は、駅前再生ビジョンが「めざす姿」とする「働く・住む・にぎわいが一体となった福山駅前」を作るということ。以前の会議ではソーシャルディスタンスが必要な時に、「にぎわい」という言葉が適切かという意見に対し、人の数が減っても活動が盛んになる、それがビジョンの「にぎわい」という概念だという議論があった。ウォーカブルなまちは、活動が盛んになり投資が行われるという、量的ではなく質的ににぎわいをめざすもの。

ウォーカブルな駅前広場の実現に向けた意見

1 福山市民の誇りを駅前で表現する

- 福山市民が誇りに思っていることを駅前で表現することが大事だ。福山市の誇りは、福山城やばら、活躍目覚ましい福山シティFCなどが挙げられる。
- 福山には福山城というコアの存在があるが、鉄道で分断された歴史がある。今回をきっかけに駅の南北で福山城を表現することも大事だ。ばら関連の商品の販売や、バラの色の表現など、福山市の誇りを駅周辺で表現すると良い。
- 駅前福山市民の誇りを表現する場として、市民の関心を高め、積極的に関わってもらうことや事業者の方々に駅前とつながってもらうことが大事だ。
- まちづくりには、自分たちのまちを自分たちで守り抜くという「パブリックマインド（助け合いの精神）」が大切だ。それに行政が関わるのが公民連携。福山はスポーツや芸術に対して意識が高く、歴史もあるまちなので可能性がある。
- 小道を抜けると広場が広がっていて、日常的に様々な利用されている。そのような人がまちに誇りや自信を持てる広場が欲しい。

2 「ウォーカブルなまちづくり」に対する認知度の向上

- なぜウォーカブルな空間にしていく必要があるのかが見えてこない。ウォーカブルという表現が認知されていない。そういった中で、駅前広場を、なぜウォーカブルな空間にしていけないといけないのかという説明が前提にないといけない。
- ウォーカブルの先の目的について、ウォーカブルは手段だと思うので、行政はウォーカブルな都市を実現してどうなりたいか、どう変わっていくかを宣言すればいい。そこに対しての肉付けというか、目的設定は市民会議や市民ヒアリングを含めて、アップデートしていけばいい。
- ウォーカブルな都市のイメージについて、市民や事業者などの当事者の視点で手応えが感じられる目標像を示し、どういうふう実践していくかを改めて議論してもよい。

（次頁に続く）

3 駅前広場と駅周辺を一体的に検討する

- 駅前広場は、周辺エリアも含めてというのがポイントだ。駅前広場の将来像というよりは駅前広場とその周辺の将来像を検討すべき。
- 今の駅前広場は先進的で機能的に作られた広場だが、社会状況が変化の中で、環境空間が求められてきた。駅前広場のエリアだけで考えると場所が足りないため、ウォーカブルなまち全体が駅前広場であるといった、駅周辺を一体的に検討するという考え方が大事だ。
- 駅前広場のウォーカブルをどうやって実現していくのか。限られたスペースなので、駅周辺の伏見町や三之丸町と協力していくということだと思うが、用途に柔軟性を持たせるのが良い。伏見町や三之丸町にある機能と被らないように全体で設計していくことが大事だ。
- 駅周辺とは何を指すのか対象を明確にすることも大事だ。駅周辺の店舗や道路、駐車場、駐輪場など駅前広場と一体的に検討するものを明確にすることで、関係者の当事者意識が高まってきたり、無関心だった部分に興味がわいてくる。
- 駅前広場があって、その周辺があり、さらに市域全体に広がるような関係性を明確にして、全体を捉えながら、駅前広場を考えることが必要だ。
- 交番の跡地はぜひ広場の計画に連携するようなものを考えていただきたい。また、南口だけでなく、北口と南口を一緒に考えて駅周辺を活性化させていく、そのためにはJRの協力が欠かせない。

4 誰に焦点を当てるのか

- 駅周辺を「ウォーカブルな空間に転換していく必要があります」としているが、そもそも誰にとって必要があるかを明確にしたほうがよい。
- 鉄道を近距離で利用する人の目的は、通勤、通学、買い物などで、中長距離となるとビジネスや観光などである。また鉄道を利用しない人も駅前広場を利用している。様々な人が駅前広場を利用しているため、ウォーカブルな駅前広場を考える際には、誰に焦点を当て、どうするのかを総合的に考える必要がある。
- 歩くには目的がいる。駅から広がる動線や駅へ向かう流れに対し、歩きたくなる目的として、魅力の掘り起こしと作り上げの整理が必要。日常的な使い方、様々な広場の使い方のイメージを膨らませていければよい。

5 出会いや交流によるイノベーションの創出

- 駅周辺は備後地域の拠点で都市の核となる場所だ。都市の核となる場所は、ビジネスの拠点を形成することにより、イノベーションを生み出すようなクリエイティブなものが集合・集積する必要がある。
- ウォーカブルな駅前広場の機能や役割として、革新的な取組や予測していないような連携、新たな産業などが生まれてくるようなことが考えられる。そこをめざして広場整備の目標が設定できるとよい。

6 情報発信の必要性

- 多くの人がイメージを共有できるような具体例を出すことが大事だ。具体例があればイメージを共有しやすく、他の人にも伝えやすい。

7 駐車場の必要性

- ビジネスで駅を利用する場合、車でのアクセス性や駐車場機能の確保が重要。駅周辺での「ウォーカブルなまちづくり」は、ただ単に歩行者の空間を増やすのではなく、「車で来やすく、駐車場にも駐車しやすく、歩いて楽しいエリア」をめざすものだ。
- 小さな駐車場が個別で運営されている状態から、エリア全体で運営されている状態へと変える仕組みがあると良い。例えば、市営駐車場を利用してまちなかの小さな駐車場を無くしたいという方向性がある場合、小さな駐車場を借りて、市営駐車場の利益を分配すれば、少しずつ小さな駐車場を大きな駐車場に集約していくことができる。

8 コロナ禍での空間の形成

- 地下街などの雨がかからない考え方は、コロナ禍で閉鎖的な弱点を抱えていると意識が変化しつつある。そのため外に開放されて雨がかからない空間をどうやって連続させていくかが福山に適している。
- コロナ禍では、まちなかの公共空間と組み合わせ、快適で密になり過ぎない空間を作っていくことが必要。駅前広場の検討では、そういうことも含めてしっかりとデザインをし、ウォーカブルな空間の形成やエリア価値の向上につなげてもらいたい。

9 制度設計の必要性

- まちの美観を確保するなどのエリアのマネジメントをするためには、エリア内の権利者のマインドを一致させることが重要になる。エリアの美観や考え方によって、その権利者が出した利益の一部をまちなかに再投資するといった発想や制度設計が必要になる。
- 民間事業者がまちなかに投資しやすい制度をわかりやすい形でつくっていくことが大事だ。